

古生物復元画と博物館

小田 隆

プロフィール
1969年三重県生まれ。画家、イラストレーター、大学教員。東京藝術大学美術研究科修士課程修了。恐竜の化石の組み立てに参加したことから、復元画の制作を始める。個展やグループ展を開催し、博物館のグラフィック展示、図鑑の復元画、絵本など制作物も多数。幅広い古生物学者たちと交流を重ねながら、科学的に調査された資料をもとに、オリジナリティに富んだ作品群を生みだしている。著書には『うつくしい美術解剖図』（玄光社）などがある。

古生物復元画と書いて、すぐに何かをイメージ

できる人は少ないだろう。でも、博物館などに展示されている恐竜やマンモスの絵のことだと説明すれば、多くの人はすぐにその内容をイメージすることができるとは思えないだろうか。ではそれらがどういう過程を経て作られているか？という問いに正確に答えられる人は、博物館関係者でも少ないかもしれない。

古生物は絶滅した生物なので、現在、生きている姿を観察して描くことはできない。しかし、それらは全て地球上に生息していた生物だ。過去の地球環境は時代によって大きく変化をしているし、絶滅してしまった系統関係もあるが、大きな意味で現生種につながる系譜と言える。

脊椎動物の場合、化石として残るのは主に骨だ。全ての部位が発見されることは稀で、多くの場合、部分から全身を復元しなくてはならない。そして、筋肉組織、脂肪、皮膚などを検討していく。また、全ての過程において研究者との共同作業は、最も重要な要素である。現在の細分化された研究領域では、複数の研究者と仕事をすることも多い。環境も含めて当時の世界を描写した生態環境復元画となると、さらに古植物や堆積学、無脊椎動物な

どの研究者も加わることとなる。

復元において活用される、もうひとつ重要な研究領域に美術解剖学がある。美術解剖学は現生種のヒトや動物の内部構造を知ること、よりリアルティのある豊かな表現を目指すものだ。絵画彫刻だけでなく、アニメ、漫画、イラストレーションにも応用されることがある。生きた生物の内部構造を知り理解すること、化石しか存在しない古生物の姿を思い描くことは、復元という作業において外すことのできない両輪であると私は考えている。

筋肉には起始と停止がある。起始とはその筋肉の支点となる部分、停止とはその筋肉の収縮によって動かされる部分のことである。これらを復元された骨格図のなかに見つけていくことで、筋肉の復元を行うことができる。稀に発見される鱗や羽毛の化石から体表を復元できることもあるが、近い系統にある現生種との比較から皮膚を復元することのほうが多い。しかし、どこまでいっても、確実に正確な姿を復元することは難しく、想像の域を出ないというのが事実である。それでも日々、更新される発見と新たな知見から、すこしでも真実に近づきたいと考えている。

月刊 みんな

2月号目次

- 1 エッセイ 千字文
古生物復元画と博物館
小田 隆
特集 朝枝利男とガラパゴス
- 2 1930年代ガラパゴスの旅
——写真家朝枝利男の見たもの
丹羽 典生
- 4 ガラパゴス研究史における
クロッカー調査隊と朝枝利男
伊藤 秀三
- 6 フロレアナ島のドイツ人
——ガラパゴス事件をめぐる
新木 秀和
- 8 朝枝利男とテンブルトン・クロッカー
——芸術と科学の旅
ピーター・J・マシウス
- 10 ○○してみました世界のフィールド
ロープウエーで天空の街をめぐる
吉江 貴文

- 12 みんなく Information
- 14 想像界の生物相
ウリヤンハイのシャマンの依り代
シヨムファイ・ダーヴィド
- 16 みんなく回遊
みんなくで大西洋奴隷交易に触れる
鈴木 英明
- 18 シネ倶楽部 M
神の言葉に耳をすます
——「シャルギー（東洋人）」
相島 葉月
- 20 ことはの迷い道
エジプトの IBM
末森 薫
- 21 次号予告・編集後記